

Back Number

本論文は

世界経済評論 2024 年 7/8 月号

(2024 年 7 月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%
送料無料
OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

蕪村の発句と「脛」の読み

今年は2月26日、Nichibei Exchangeの会合を初めてぼくのところで持ち、ぼくは蕪村の発句「夕風や」ととりあげた。これは幹事の Alexis Agliano Sanborn さんが「俳句でもいいか」と言ったせいもあるが、1980年代の終わりに生まれたこの非公式、不定期的会合も変わったものだ。

日本経済は世界を席卷か

1970年代には日本の造る物品が何故かくもアメリカを席卷しているのか、低賃金、ダンピングはどうか、gray marketの使用やいかんといった喧々囂々だったが、つづく1980年代には日本経済が世界を席卷するとともに論じられた。そこで、日本を知るアメリカ人、アメリカを知る日本人が時折あつまって話し合ったらどうかというので生まれたのがNichibei Exchangeである。

この会合は「会員」はなかったが、いつか幹事が決まり、毎回話をやる人を決めた。会場場所は出席する弁護士が自分の法律事務所の会議室を提供することが多かった。幹事を長く務めたのは日本で宣教師だったMike McKennaさんである。そのMcKennaさんも辞め、数年前には会議室を提供する弁護士もいなくなったのか、会議室を使えなくなった。

ぼくが最後に出席した会議室は豪勢だったが、話の中ではAlexisさんが動画を使って話した日本の学校昼食には感涙した。日本では一日の授業が終わると生徒が教室廊下を清掃することなどを、ぼくはすっかり忘れていたせいもある。そのころまでには、話の内容は喫緊の日米関係から離れたものになっていた。

Alexisさんは江津市で教師をしたことがあり、ほどなく日本の学校昼食について映画を作って賞を得た。そして幹事になり、いくつかの場所で会合をもったあと、ぼくのところに持ってきた。

「脛」の読み

ぼくが話に選んだ蕪村の「夕風や水青鷺の脛を打つ」は長いこと気になっていた。

まず、この句の「脛」をどう読むか。この点について、日本にいる友達に、インターネットを見ると大半「はぎ」と読ませていますが、どう読みますかと尋ねたことがある。すると、手元の漢和辞典（『新漢語林』）によると、「すね」が「広く用いられている」と報じてくださった。

この読みが問題になったのは、おそらくCor van den Heuvelがこの句の拙訳を見て、もとの言葉は何にせよshinsと訳したら台無しだ、ここはlegsでなければならないと言ったことに戻るだろう。Corさんは英語で作った俳句から優れたものを選んで『The Haiku Anthology』と題し、三冊の本を別々の大手出版社から1974年、1986年、1999年に出した、その面では大御所である。

拙訳は、ぼくがBurton Watsonと共に出した日本詩歌英訳集『From the Country of Eight Islands』（1981年）にある。

Evening wind: the water strikes the shins of a
blue heron

ただし、Corさんがこの蕪村の句の英訳についてshinsではダメだと思い始めたのは、拙訳ではなく、日本文学の大御所のDonald Keeneの訳を見た時だったかもしれない。

The evening breezes —
The water splashes against
A blue heron's shins.

日本の発句／俳句の外国語訳の蒐集などをするHaikupedia主幹Charles Trumbullさんによると、Keeneがこのシラブル5-7-5/3行の訳を最



佐藤 紘彰

初に出したのは1971年の著作『Landscapes and Portraits: Appreciations of Japanese Culture』だったらしいが、1976年の『World Within Walls』にも出た。これはKeeneの日本文学史4部作の最初の巻で、扱ったのは江戸時代だった。そこでは引く発句は全てローマ字表記を付けており、「脛」はsuneと綴っている。

ばくも「脛」は「スネ」と読んでいたにちがいない。なぜなら、「ハギ」と読めばcalvesと訳したにちがいないからだ。

「脛」はもちろんスネともハギとも読む。これは時代には関係がなかったようで、『広辞苑』（第四版）には、「すね」は「(脛・脛) 下肢の、膝から踝（くるぶし）に至る部分。はぎ」とあって、使用例として、元禄太平記「古帷子（ふるかたびら）一つ召して、すねから火を取るこの西鶴同然の御ありさま」を挙げている。

この『元禄太平記』は1975年NHKが大河ドラマ化した南條範夫の小説ではなく、1702年に出版した浮世草子で、時代は極めて近いが、南條の小説のように赤穂浪士を扱ったものではなかった。

『広辞苑』には、また、「はぎ」の方も、「膝から下、踝（くるぶし）から上の部分。すね」とあって、使用例として、古今雑体から「いつしかとまたく心を脛に挙げて」を引いている。古今雑体は古今集で出てくる部類の一つで、これはそこに出る藤原兼輔の歌（1014）である。

更に、『故事ことわざ辞典』には、「脛に傷あれば」の場合、「脛」と書いて、「すね」とも「はぎ」とも読ませている。「すね」の方に、「脛（すね）に疵（きず）あればかや原を走らぬ」を『世話尽』を典拠として出す。これを同辞典の「資料一覧」でみると、1656年出版とある。

脚そのもの

ハギにせよスネにせよ、英語では脚の部分では

ダメ、脚そのものとしなければならぬとするCorさんは、自分の英訳として次のように示す。

evening breeze
water laps against
the heron's legs

そして、これは蕪村の句では最高のものと言いつける。

Charlesさんの集める30数点の外国語への訳を見ると、フランス語訳も含め、なるほど脛を「脚」と訳したものが大半である。

蕪村自身の読み

「夕風や」の「脛」の読みを佐藤みどりに尋ねたら、「ハギです。これをスネなどと読んだら蕪村が泣くでしょう」とのことだった。みどりさんはここNew YorkのMetropolitan Museum of Artで長いことtextile conservatorをされた。たまたま、と言え、そのみどりさんには失礼かもしれないが、蕪村はこの「脛」には「ハギ」と読みをつけていた。安永五月二日の柳女、賀端当ての手紙に自句を七つ引く。

みじか夜やさゞらなみよる捨簾
けしの花籬すべくもあらぬ哉
落合て音なくなれる清水哉
夕風や水青鷺の脛^{ハギ}を打
花茨故郷の道に似たるかな
垣越えて暮の避行かやり哉
目に嬉し恋君の扇真白なる

うち「花茨」は、萩原朔太郎が蕪村を「郷愁の詩人」と呼んで讃嘆していたと思うが、全集16巻を図書館にあげてしまった今、確認できない。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY